

第一話 流しのお化け

稲場 紀久雄

昭和六十一年に下水文化の調査をした時、「流しのお化け」に関係のある報告が四件ありました。長く下水道の仕事をしてきましたが、今までこのような話を聞いたことがありませんので報告したいと思います。

四件というのは、山形県の鶴岡市から二件、同じく酒田市から一件、富山県の氷見市から一件の合計四件です。東北と裏日本の北陸ということで気候的に共通性がある点に留意する必要がありますでしょう。鶴岡市の二件は、これから少し詳しく述べますが、酒田市と氷見市の二件は、台所の流し尻に神様をまつるといふ話です。

さて鶴岡市の第一話ですが、これは「ながしのばけもの」といふ昔話です。内容は次のとおりです。

昔あったけど、ある家のおばあさんが

「グーニン、グー。グーニン、グー」

と、糸車まわして、夜おそくまで、糸をとっていただけ。そ

うすると、

「オラ、ウレシヤ、オッカメサン、ヒトヨンナベ、ペーロリン」

「オラ、ウレシヤ、オッカメサン。ヒトヨンナベ、ペーロリン」

「オラ、ウレシヤ、オッカメサン。ヒトヨンナベ、ペーロリン」

と歌いながら、ばけものが、ゾロゾロとでてきたもの。おばあさん、腰ぬかすほどびっくりしたども、グッとがまんして、そのばけものが、どこから来たものかと、考えて見たど。

ひょっとして、ながしの下から出るのでないかとおもい、次の日、ながしの下をしらべて見たど。そしたら、そこには、箸^{ハシ}だかし、ヘラだかし、しゃくしだかし、ママ粒だかし、一っぱい落ちて、たまっていただけ。

おばあさん、さっそくそこをかたづけ、きれいにしたら、

ばけものは、あと、でてこなくなっただけど。

(出典 大山民話集)

第二話は、「羽黒山二百話」(戸川安章著、中央企画社、昭和四十七年刊)にのっている「ながしの落し口をふさぐと巫女に神がつかぬこと」(第二十三話)という話です。その内容は次のとおりです。

「巫女が神おろしをするときに、ながしの落し口をふさいでしまうと、いつまでたっても神がつかないといわれている。これは、神さまが人間の家にはいりをするには、ながしの落し口を通られるためだという。それゆえ、ながし口は、いつも清潔にしておかなければならないのである。」

次に話の順に私の解釈を述べてみたいと思います。まず第一話の「グーニン、グー。グーニン、グー。」という点です。夜も遅くなって、おばあさんが昼間の疲れが出て、うつらうつらと居眠りをしながら、それでも糸車を回しています。その様子が何となく明るくほほえましい雰囲気を読ませています。糸車は、古くてブーンと調子の良い音はたてません。それに、「グーニン、グー。」は、「愚人、愚」の掛け言葉のよう、明るくはやしたて擲擲しているようです。

それから次に、「オラ、ウレシヤ、オツカメサン、ヒトヨンナベ、ペーロリン」についてですが、私は次のように解釈します。「オラ」は「私」、「ウレシヤ」は「うれしいな」、「オ

ツカメサン」は「おかめさん」、「ヒトヨンナベ」は「一夜夜鍋」、「ペーロリン」は単なるはやし言葉。ですからこの文章は、「わーい、うれしいな、おかめさん。今夜ひと晩夜鍋、わーい、わーい。」という意味なのでしょう。

最後に、「考えて見たど」、そして「次の日ながしの下をしらべて見たど」は、ばけものの姿形がながしの下に落ちていると思われるものに似ていると思ったため調べてみたということ、これは説明するまでもありません。

さて、第二話ですが、現世と神の世界が落し口でつながっているという認識は何ともいえず興味深いものがあります。

この文章で「ながしの落し口をふさいでしまう」という部分に私は特に印象的です。主語は当然「汚濁物」でしょう。ただ私はこの部分から次のような想像をしたい。それは、当時の人々が落し口をふさいで、排水の中の汚濁物を丁寧に取り除き、そのあと落し口を開いて排水を流していた、そうゆうことを習慣にしていたのではないかということ。「ふさぐ」、「あける」という行為が流しの落し口にあった、常に落し口は開放して流し放題ということではなかったのではないか。ともかく、この世とあの世をつなぐ神聖な落し口を清浄にする人間の積極的な行為があっても何の不思議もないのであって、第二話はそれを連想させると思います。

ところで、わが国で昔から信じられている家の神について、

飯島吉晴さんの「竈神と廁神」(人文書院刊)から簡単に紹介しておきましょう。

飯島さんは、次のように解説しています。

『家屋内に祀られている主要な家の神には、大神宮、エビスや大黒などの福神、竈神、納戸神などがある。このほか、廁(かまど)(便所)、井戸、厩(うまや)、倉などの付属施設にはそれぞれ廁神、井戸神(水神)、厩神、倉の神などが祀られている。

家の神は表側に祀られる公的な神と、家屋の暗い裏側にひっそりと祀られている私的な神とに大別できる。前者は座敷や板の間の鴨居に棚を吊って木製の祠堂を安置し、中には伊勢皇大神の大麻や中央の有名な神社や鎮守のお札が祀られているが、後者はこれといった特別の神体もたず単に御幣をさしてあるだけという形のものが多い。大神宮や仏壇を代表とする表側の神は、包括的な祖先神を中核とした極めて抽象的な神(仏)であるが、一方エビス・大黒をはじめ竈神、廁神、井戸神、納戸神など住居空間の中の暗い領域に祀られている私的な神々は、それぞれ多様で具体的な機能をもち、庶民にとってより親しみ深い神になっている。表側の神は立派な固有名詞(神名)をもつのに対し、裏側の神は神というよりは精霊的な性格を濃く残しており、土着の家つきの神として普通名詞的な神名で呼ばれている。しかも普遍的な世界を前提としていないために、裏側の神は味方にすればこれほ

ど心強い神はなく、反対に敵にまわすと激しく祟る恐しい障礙神ともなる。

竈神はこうした裏側の神々の代表といえるが、祭場やその他の否定性にもかかわらず、かえってそれをこにして、人の生死や幸福、作物の豊穰を司る生活全般の神になっている。竈神は穢れに敏感で、荒神とよぶ所も多いように、祟りやすく恐しい神とされ、さらに醜い女神、気むずかしい神、不具(片足、目が悪い、耳が遠いなど)やケチである(貧しく、供物も粗末なものを好む)という伝承を伴っている。竈神はこうした否定的なイメージをもつ反面で、家の盛衰や人の幸福や寿命を司り、生活全般にわたって恩恵を施してくれる神ともされている。いわば、竈神は否定性と肯定性の相反する二面性をもった両義的な神といえ、このために此の世と異界を媒介することも可能なのである。この二面性は、竈神に限らず、エビス・大黒、納戸神、廁神などの家の神にもみられる。こうした裏側の神は、すべての神々が出雲にでかける神無月にも家にとどまるという留守神になっているものが多く、またその司祭者もたいていその家の主婦があたるという古い祭祀形態を残している。』

流しの落し口、そこにまつられる神というものの、人々のそれに対する気持というものの意味をこの解説はびつたりと説明していると思います。改めて言う必要ありませんが、流

し尻の神は、私的な神・裏側の神に違いありません。

日本の土着の人々、縄文時代の人々が信じていた土俗的な習俗、おそらく一万年近く持ちつづけてきた習俗がたまたまごく最近まで残って冒頭で紹介した四件の報告になったのではないかと思えます。しかもこの四件の話が冬期に雪が深く気候の厳しい山形県と富山県に残っていたという事実は、汚水が人間の健康や生活に与える悪影響がこれらの地域ではより強かったのではないかと思わせます。

私は、長い間下水道を仕事としてきましたが、以上のような話を昭和六十一年に調査するまで知らなかったのです。しかし、知らないという状況が一般的なのではないのでしょうか。自分が行う行為の結果など考えてもみず、流し尻の神の意味など頭から問題にもしない鈍感さでもって汚水を流したい放題流しているのが現状でなければ幸いなことです。でも少くとも私のような者がこのような話を知らなかったということは、自分ながら恐ろしいことです。私は、「流しのお化け」のような話を現代的な姿で復活させてみたいと思います。

討論

稲場 神様にも公的な神と私的な神とがあるようですが……。
安田 最初は皆私的な神ではないですか。それが集落が発達するにつれて自動的に公的な神となった。結局家の外に出さ

るを得ないから。

石丸 私の出身地は四国の松山ですが、正月になると藁に裏白で簡単なお飾りをつくり、家中のいたる所につけました。家の表口はもち論、裏口から鶏小屋から、はては自転車にまで。台所の流しにも水道の蛇口に丸い形にしてひっかけてつけました(図一)。つけた所では手を合せておがむ。子供の頃、蛇口におがんだのをおぼえています。かまどや便所は、おがむ場所としては中心でしたね。お飾りをつけておがむ中心は父で、皆父にならっておがんだものです。そんな記憶があります。

渡辺 私の生家は、千葉の外房、大原の在で夷隅郡にあり、五百年続いた農家です。海岸から山へ三里程も入った所です。私の父が同じようなことをしていた記憶がありますね。女はやりません。お勝手に井戸があり、水神様がまつってある。正月には井戸側にしめ縄を張ります。若水はバケツにお飾りをつけたもので汲みます(図二)。お飾りは、藁で鳥居型につくり、裏白と讓葉がつけてある。

表の神は、伊勢の皇大神宮をまつります。鴨居にあります。鳥居型で大変大きいんですが藁でつくるのです。足が十二ヶ月にわけてあって、それを組んである。非常に太い(図一三)。かまどは荒神様と言いました。便所にもお飾りを入れます。便所のことを手水場と言いましたが、神様の名前は思

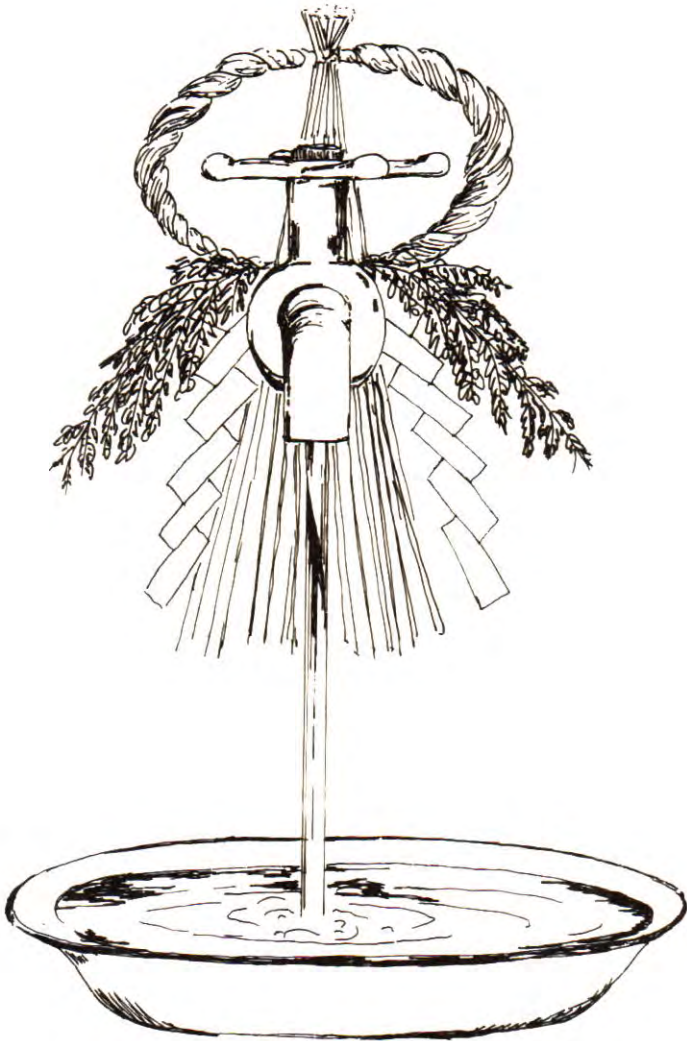


図-1 蛇口につけたお飾り

石丸氏の思い出「蛇口の上め飾りをつらつら思い出しますのに、裏白のみ鮮明に思い浮かび、高山の草むらから泉の湧き出てくるような感じで若水を蛇口から受けとったような気がします。」

い出せません。でも大層あがめていましたよ。
 稲場 石丸さんも渡辺さんも子供の頃、少くとも三十年から五十年前でしょうが、そんな思い出をお持ちなんですね。それなのに今の子供達は、すっかり何一つ知りませんよ。不思議な気がします。
 渡辺 初水（若水）は男が汲みます。「元日や、つるべの音は鶴の声」などとお目出度い言葉をとなえつつ、ひしゃくで……。
 稲場 石丸さん、子供心に何故おまいりをするのか、不思議に思われたことはありませんか。理由を聞かれたことは。
 石丸 思いました。聞いてみてもわからないのです。でも意

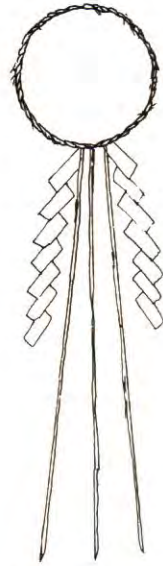


図-2 バケツにつけた輪飾り

味不明の行事であるようです。例えば、正月に水桶に白米をまくのですね。何のためにそうするのか、いくら考えてもつじつまが合わない。長い間ずっとやっているからやるんだ

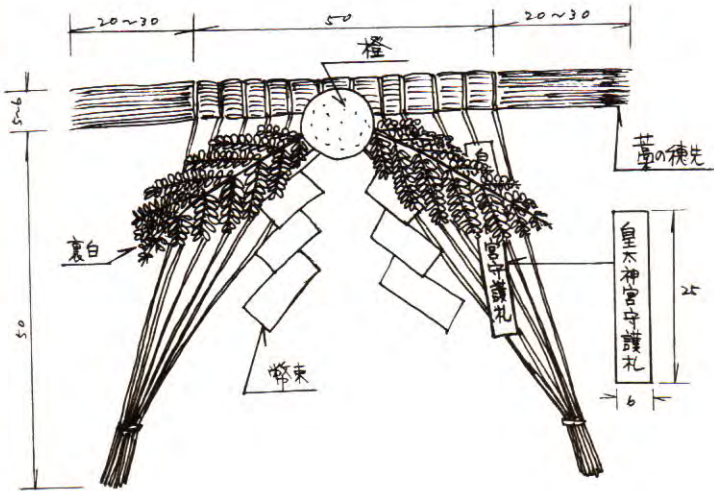


図-3 皇太神宮のお飾り (単位cm)

という以外わからないのです。正月のしきたりでも今もやっていますよ、私の故郷では。もち論、東京の私の家ではやらない。

谷口 原始宗教では自分達に恩恵を与えてくれるもの、脅威を与えるもの、皆神様だったという気がします。

稲場 タブーに現代的な光をあてることも大切ですね。「川に小便をするとオチンチンがはれる」など全国各地にあるタブー、昔の人はええなかったという気がします。

渡辺 昔「女が下水管に入れない。」というタブーでひどい目にあつたことがある。「女はトンネルに入れない。」。工事責任者が女性記者を工事現場に入れないという。事故が起ると言うのです。それで記者クラブが怒つた。たのみこんで結局入れてもらったのですが、後でお浄めに大変金がかかりました。やはりタブーは今も生きています。

西村 一ヶ月前都議会議員の視察で同じことが起りました。それで、立抗の底までで我慢してもらいました。地面は女神、女性と喧嘩すると言うことですね。

谷口 「けがれ」をはらうためにキリスト教の洗礼は水を使います。仏教・神道のみそぎも水を使う。

稲場 古事記では水の神を生んだのは女性でそれは大地を意味するのではないか。ドイツ語でも大地は女性名詞です。

谷口 カップバ伝説がありますが、頭の皿がかわくと死ぬというのは水きぎんを象徴していると思います。東北と九州で違

うなど地方性もある。親しみを持った水の神ですね。

中村 福岡渇水の時、民間伝承のカップバ伝説を集めたところ、カップを神様と同格と扱っていました。大変親しみをこめた形ですね。

石丸 筑後川はカップと縁が深いようです。平清盛の奥方を引き込んだとか……。

稲場 カップバ伝説には大変奇妙なところがあります。手を切られたり、たくさん出て来ていたずらしたり、神様なら一人でもよいのに。はては河原乞食にも関係を持つようです。神様か、そうでないのか、難しい所があるのではないでしょうか。

中村 私的な神にあたるのではないですか。個人的な部分に係わって、親しみも持てるが、同時に大変悪いこともする。稲場 カップバ伝説には、いろいろな説があるようです。時間も遅くなりましたのでこれで終ります。

(昭和六十二年三月二五日、日本下水道事業団霊南坂分室にて)

著者の現職・前職

現在、日本下水道事業団計画部上席調査役。前建設省都市局下水道部流域下水道課建設専門官。